

龍谷大学 社会学部

2021 年度
社会共生実習
活動報告書

目次

ご あ い さ つ	3
地域エンパワねっと・大津中央	4
(1) 取り組みの趣旨・目的	4
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	4
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	6
地域エンパワねっと・大津瀬田東	8
(1) 取り組みの趣旨・目的	8
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	8
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	10
「子どもにやさしいまち」を作ろう	11
(1) 取り組みの趣旨・目的	11
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	11
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	12
雑創の森プレイスクールプレイワーカー	13
(1) 取り組みの趣旨・目的	13
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	13
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	13
大学は社会共生に何ができるのか—文化財から“マネー”を創出する—	15
(1) 取り組みの趣旨・目的	15
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	15
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	16

農福連携で地域をつなぐー「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」	18
(1) 取り組みの趣旨・目的	18
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	18
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	19
いくつになっても、出かけられる！～高齢者を元気にする介護ツアー企画～	20
(1) 取り組みの趣旨・目的	20
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	20
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	22
多文化共生のコミュニティ・デザイン～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～	24
(1) 取り組みの趣旨・目的	24
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	25
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	27
障がいをもつ子どもたちの放課後支援	28
(1) 取り組みの趣旨・目的	28
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	28
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	29
自治体を PR してみる！	30
(1) 取り組みの趣旨・目的	30
(2) 2021 年度の取り組みの紹介	30
(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題	31
発信情報	32
WEB	32
メディア	32

ご あ い さ つ

2021 年度 社会共生実習担当者会議

議長 大西 孝之

コロナ禍 2 年目となった 2021 年度の社会共生実習でしたが、今年度も地域の住民・自治体・企業など、みなさまのご理解とご協力をおもちまして、受講生は担当教員とともに現場における課題について探求・解決を図ることができました。厚く御礼申し上げます。

今年度は 10 のプロジェクトが運営され、114 名の受講生が参加しました。2017 年度に社会共生実習が開始されて以来、ともに過去最多の数となりました。これまでご参加・ご協力いただきましたみなさまのおかげをおもちまして、充実したプログラムとなってまいりました。

今年度も学外での活動ができない期間がありましたが、受講生と担当教員は昨年度の経験を活かして、オンラインを活用した取り組みなどをより実りあるものにしました。一方で、学外での活動ができる際には、うっぶんを晴らすかのようにフィールドワークに取り組みました。本報告書では、その 1 年間の活動とその成果をプロジェクトごとに報告しております。ご高覧いただき、現代社会が抱える課題と解決に向けた展望をみなさまと共有できたら幸いです。

なお、先月、社会学部が 2025 年度から深草キャンパスに移転し、現在の 3 学科を 1 学科に改組することを発表しました。突然のことで驚かせてしまったことをお詫び申し上げます。もっとも、この社会共生実習は移転・改組後も学部教育の特色となる「プロジェクト制」の中心科目となる予定です。甚だ勝手を申し上げますが、引き続きご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

2022 年 3 月

地域エンパワねっと・大津中央

担当教員：脇田健一

(1) 取り組みの趣旨・目的

「地域エンパワねっと」(愛称は「大津エンパワねっと」)は2007年度、本学部が立地する大津市における「地域活性化」、本学部に学ぶ「学生の学びの質的向上」、そして社会学部における「教学改革」の3つを目的として始まったものである。同年度、文部科学省の「現代GP」に採択され、社会学部の全学科(当時は4学科)共同で運営される「地域連携型教育プログラム」として発足した。学生と地域住民の皆さんが直接出会い、地域課題解決のための活動に向けて協力し合うことを通じて、相互にエンパワメント(潜在化した力を引き出すこと)され学び合う関係を創出することを目指した。また、教員が学科の壁を越えて、教育上の連携を行う試みでもあった。本プログラムが起点となり、2016年度カリキュラム改革において、多くの講義系科目の相互乗り入れと「社会共生実習」の実現につながった。

本プロジェクトの最大の特徴は、学生が取り組むべき課題を学生自身が地域社会のなかから発見し(課題発見)、学生が地域住民の皆さんとともに実際の課題解決のための実践に取り組む(課題解決)という点にある。ただし、このような「課題発見×課題解決」に取り組むことは、学生にとっては極めて難易度が高いといわざるを得ない。そのため本プロジェクトでは、担当教員と地域住民のリーダー層(地元自治連合会役員等)とが定期的に(原則毎月1回)会合(「大津エンパワねっとを進める会」)を開き、地域の動きや学生の動きを常に共有し、そのような情報共有に基づき学生たちの指導が行われてきた。

また、地域住民の皆さんと共に「報告会」を開催し、活動の振り返りを行ってきた。通常、この報告会は前期と後期の終盤にそれぞれ1回開催され、学生は地域住民の皆さんの前でプレゼンテーションを行い、地域住民の皆さんからはコメントやアドバイスをいただいていた。ただし、後述するように、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、2021年度については、この「報告会」の開催は困難な状況が続き、結果として、前期の報告会は中止となったが、後期の報告会は3月21日(3月1日時点)に開催される予定である。

(2) 2021年度の取り組みの紹介

2020年度までは、「地域エンパワねっと・大津瀬田東」と合同でプロジェクトを実施してきたが、今年度から、それぞれが社会共生実習のひとつのプロジェクトとして独立して実施されることになった。

2022年度の「地域エンパワねっと・大津中央」には、2回生7名が履修した。しかしながら、昨年と同様に、新型コロナウイルスの感染拡大の中での取り組みとなり、前期は学外に出て地域の皆さんと一緒に活動を行うことが全くできなかった。そのため、1人の受

講生が後期の履修を辞退することになった。「社会共生実習」は、他の科目とは異なり、履修辞退制度が適応されないことになっているが、新型コロナウイルス感染拡大によりシラバスに沿った形で実習に取り組むことが不可能であったことから、特別に履修辞退が認められた。

前期の当初は、学外に出ることができなかったが、zoomを使用して中央学区自治連合会会長の安孫子邦夫氏に、中央学区の概要や課題、コロナ禍における地域活動の状況等についてご講義いただいた。また、自治会等の地域社会の仕組み等についても、担当教員が講義をおこなった。

学外に出ることが許される状況になってからは、中央学区子ども会育成連絡協議会の下清水千香子氏に、地域の子どもを育む様々な活動についてご説明いただいた。また、大津市役所都市計画部都市魅力づくり推進課が中央学区内で設置している「まち家オフィス結(ゆい)」を訪問し、市役所職員の藤原周二氏からも中心市街地のまちづくりの状況等についてお話を伺った。さらに、担当教員のガイドによるまち歩き、受講生自身だけでのまち歩きも実施した。

例年であれば、4月に簡単なオリエンテーションを行ったうえで、5月の大型連休前後には「地域デビュー」を行い、自治活動や地域福祉活動に関わる諸団体の皆さんとの出会いの場をつくってきたわけだが、コロナ禍により前期の活動が不十分なものになってしまった。前項で説明した「大津エンパワねっとを進める会」も、開催することができなかった。

コロナ禍で活動が不十分であったことから、自分たちの力で「課題発見」を行うことが時間的にも困難になった。そこで、上記のように限られた時間で、地域の皆さんからお話をお聞きし、地域の状況を把握した上で、前年度の受講生たちが残してくれたヒントをもとに、活動を開始することにした。前年度の受講生たちが取り組めたらと思いながらも、アイデアレベルに終わって具体化できない取り組みがあった。受講生たちは「図書館プロジェクト」と呼んでいた。そのプロジェクトは、前述した「まち家オフィス結(ゆい)」を、期間限定で親子で気軽に集まって絵本や漫画を読めるような場所にしていくことであった。中央学区は、近年、たくさんのマンションが建設され、小さな子どものいる新しい家族が多数転入してきている。そのような家族が、絵本を通じてお互いに知り合うことができれば、家族間に緩やかなつながりが生まれたらということが、アイデアの骨子であった。本年度の受講生たちは、このアイデアをヒントに、自分たちなりの課題を念頭にこのアイデアに肉付けをしていき、プロジェクトとして具体化させ、「あつまれ!みんなで作る絵本館」という取り組みになった。

(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題



「まち家オフィス結(ゆい)」を会場に、「あつまれ!みんなで作る絵本館」を開催するにしても、最初の大きな課題は、どうやって大量の絵本を集めるのかということであった。受講生たちは、学区内にある中央小学校や大津幼稚園にお願いをして、児童や園児の皆さんに自宅で不要になった絵本を寄付していただくことにした。また、中央学区自治連合会のお許しを得て、中央学区内の自治

会の回覧板や掲示板を通して寄付のお願いをした。その結果、約 400 冊の絵本が集まることになった。これら地域からの絵本の寄付のお願いに関しては、子ども会育成連絡協議会の下清水さんに、ポスターや回覧板のチラシの中身に至るまで細かくご指導をいただいた。

ただ、絵本さえ置いてあれば小さな子どものいる新しい家族の皆さんが、楽しい時間を過ごせるのかといえば、そうではない。イベントを盛り上げていくための、様々な工夫が必要になる。小さな子どもの家族を念頭に置いていたため、まず必要と考えられたのは、小さな子どもに絵本を楽しませる経験のある方たちに、絵本の読み聞かせをお願いすることであった。この点については、大津市立図書館の職員の方から丁寧なアドバイスをいただいた。また、大津市の生涯学習センターの存在をご教示いただいた。生涯学習センターでは、ボランティア登録されている読み聞かせのグループをご紹介いただくことができた。また、手品等を得意とされているグループもご紹介いただいた。それらのグループの皆さんに連絡を取り、イベントを盛り上げていただくことにした。また、受講生たち自身でも取り組める工夫も行った。身の回りの材料でできる工作のコーナーを作り、そこで受講生たち自身が幼い子どもの手伝いをしながら、本の葉やペン立て、小さなクリスマスツリー等を作ることにした。

「あつまれ!みんなで作る絵本館」は、1 回目は 11 月 1 日～11 月 12 日、2 回目は 12 月 6 日～12 月 17 日の期間に開催された。それぞれの期間中、2 日にわたって前述のイベントも開催された。1 回目は読み聞かせのグループの皆さんに、2 回目は手品と読み聞かせのグループの皆さんに会場を盛り上げていただいた。読み聞かせをしていただいたのは、「膳所おはなし文庫」の皆さんであった。団体とし



ては 50 年ほど活動を続けてこられている。1 歳前後の赤ちゃんたちが、ベテランのボラン



ティアの皆さんの読み聞かせにしっかり耳を傾けておられることに驚いた。

地域社会には、様々な力を持った皆さんがおられる。まちづくりの現場では、そのような皆さんに丁寧をお願いをして、その力をうまく組み合わせながら、活動をデザインしていくが必要になる。今回の「あつまれ!みんなで作る絵本館」の取り組みも、多くの皆さんの力を組み合わせる中で実現

した。人と人をつなぎ、まちづくりの活動をデザインしていくということがどのようなことなのか、まちづくりの大切なポイントを受講生たちも深く理解できたのではないと思う。

この「地域エンパワねっと・大津中央」を履修した6名の受講生たち自身も、それぞれの異なる能力を持っている。今回は、この「あつまれ!みんなで作る絵本館」の取り組みの中で、自分自身の中に眠っていた能力に気が付くことができたのではないと思う。そして、それぞれの異なる能力



力をリスペクトしあい、うまく取り組みを分担していくことが大切であることにも気がつくことができたように思う。イベントを成功させたこと以上に、学生たちにとってより本質的な取り組みの成果とは、そのような気づきではないと思う。

幸いなことに、「あつまれ!みんなで作る絵本館」は、地域の皆さんから高い評価をいただくことができた。中央学区自治連合会の会長である安孫子邦夫さんからは、自治連合会の活動の中で手薄になりがちで、小さな子どもさんのいる若いご家族に焦点を当てた活動であることを高く評価していただいた。実際、多くのご家族に楽しんでもらえたと思うが、課題も残された。子ども同士はすぐに親しくなるが、親の方はそれほどでもない。もっと親子でコミュニケーションが生まれるような工夫が必要なのではないか。これは受講生たちの気づきである。指導教員からも課題をいえば、それは継続性の問題になる。評価が高かった活動だけに、地域からは何らかの形で継続が期待されている。今年度の学生は、1年間で活動を終えることになるが、来年度の学生が、この活動をさらに自分たちの課題発見の中で、どのように発展させていけるのか、その辺りが課題になってくるだろう。

地域エンパワねっと・大津瀬田東

担当教員：築地達郎

(1) 取り組みの趣旨・目的

「地域エンパワねっと」（愛称は「大津エンパワねっと」）は2007年度、本学部が立地する大津における「地域活性化」、本学部に学ぶ「学生の学びの質的向上」、そして社会学部における「教学改革」——の3つを目的として始まったものである。同年度、文部科学省の「現代GP」に採択され、学部所属の全学科（当時は4学科）の共同プログラムとして発足した。学生と地域住民が直接出会い、地域運営のための活動に向けて協力し合うことを通じて、相互にエンパワメント（潜在化した力を引き出すこと）され学び合う関係を創出することを目指した。また、教員が学科の壁を越えて、教育上のコラボレーションをおこなう実験でもあった。本プログラムが起点となり、2016年度カリキュラム改革において、多くの講義系科目の相互乗り入れと「社会共生実習」の実現につながった。

本プロジェクトの最大の特徴は、学生が取り組むべき課題を学生自身が地域社会のなかから発見し（課題発見）、学生が地域住民の皆さんとともに実際の課題解決のための実践に取り組む（課題解決）という点にある。ただし、このような「課題発見×課題解決」に取り組むことは、学生にとっては極めて難易度が高いといわざるを得ない。そのため本プロジェクトでは、担当教員と地域住民のリーダー層（地元自治連合会役員等）とが定期的に（原則毎月1回）会合（「大津エンパワねっとを進める会」）を開き、地域の動きや学生の動きを常に共有し、そのような情報共有に基づき学生たちの指導がおこなわれてきた。

学生にはまた、地域活動の成果をわかりやすくまとめて地域住民にフィードバックする「報告会」への参加と口頭報告および文書での報告が求められる。報告会は前期と後期の終盤に各1回設定されており、学生は地域住民の前でプレゼンテーションをおこなう。

2020年度までは、本学瀬田学舎の最寄り地域である「大津市瀬田東学区」と「大津市中央学区を中心とする地域」（中央地区）の2ヶ所での取り組みを一体的に運営してきたが、2021年度からは分離しそれぞれ運営することとなった。

(2) 2021年度の取り組みの紹介

2021年度は、3回生5名、2回生2名の計7名が14期生として履修した。3回生のうち2名は前年度からの継続である。

今年度は前年度に引き続き、「コロナ禍」の中での授業運営を強いられた。本プログラムは学生が地域住民と交流し地域活動に参加する中から、解くべき課題を住民と共に見いだすことが最も重要な特徴である。しかし、今年度は地域住民側においても対面による活動を行うことができない状態が続いた。とくに春から夏にかけては定例会議の開催もできない状況であった。また、学生も本学独自の感染防止対策に基づいて学外での実習が強く

制限された。このため、地元住民との交流を通じて課題を見いだすという活動がまったくできなかった。かろうじて、瀬田東学区自治連合会会長と Zoom で懇談することができたが、それ以外は教員が学生に代わって地元学区役員会に参加し、地元ニーズを聞き取ったり学生の発想を伝えたりするといった次善策を採るにとどまった。教育効果は極めて限定的にならざるを得なかった。

そうした中、学生が見いだした課題は「コロナ禍における住民地域活動をどうすれば実現できるか」であった。この問題意識に基づき、県外他地区における「オンライン公民館」の取り組みをリサーチし、瀬田東学区への移植を試みた。

移植のために地域幹部と情報交換をしたところ、オンライン公民館を実現するには住民の多くがパソコンやスマートフォン（スマホ）を利用できることが前提であるという観点が浮上してきた。

こうした経緯から、最終的には地域の高齢者を対象とする「スマホデビュー講座」を開講することを今年度の具体的な取り組みとすることを決定した。

まず実施したのは、スマホに関する高齢者のニーズの把握である。瀬田東学区自治連合会と大津市瀬田東支所の協力のもと、住民アンケート調査を行った。自治会ルートで調査票の配布をしていただき、支所に設置した回収ボックスによって回収した。アンケートにより、高齢者の間でもスマホの普及が進んでいること、その一方でスマホの使い方について知る機会が少なく使い道が限定されていること、とくに新型コロナウイルスワクチンの接種申し込みでスマホが使えない例が少なくないという実態が明らかになった。

アンケートで得られた知見を基に、学生主導でスマホデビュー講座を企画し、以下のとおり実施した。（図1、図2）

イベント名： 「瀬田東スマホクラブ」

日時： 2021年12月12日（日）13:30～16:00

会場： 瀬田東市民センター3階大会議室（センターより無償提供）

募集方法： 各自治会の回覧板に添付する形でチラシを450部配布

参加者数： 22名（事前申し込み18名、当日参加4名）

※参加者は全員が70代以上だった



図1



図2

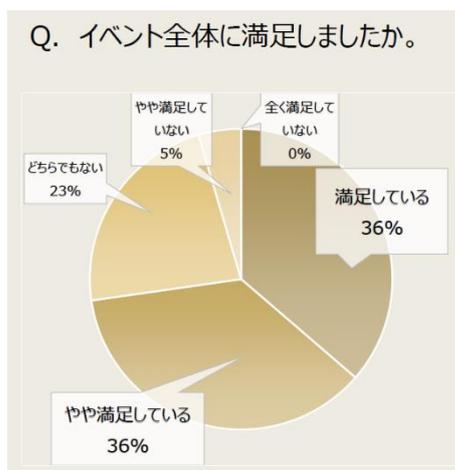


図 3

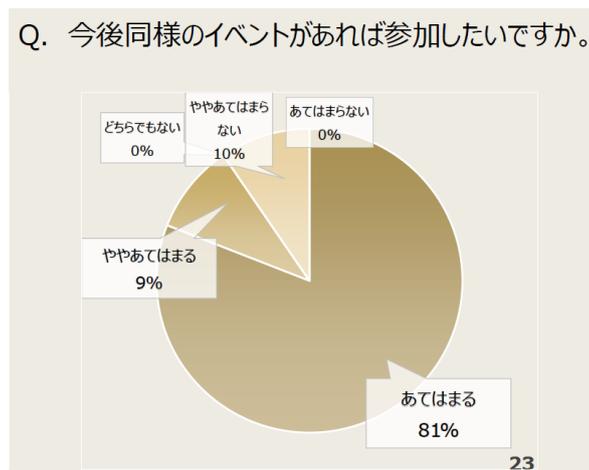


図 4

参加者に対して行った参加後アンケートによると、過半数が「満足」「やや満足」と答え、9割が同様のイベントの継続を求める結果となった。地域の高齢者の間でスマホを自由に使えるようになりたいという潜在ニーズが小さくないことが分かった。(図 3、図 4)

なお、今回のイベントを通じて、スマホの OS が生み出す世代間ギャップの存在が明らかになった。企画運営したエンパワ 14 期生は全員が「iOS」(機種名は iPhone)であったが、高齢者に普及している操作が限定されたいわゆる「簡単スマホ」は全て「android」OS であったことから、学生が個別の参加者ニーズに応えることができなかった。

しかし、エンパワねっとにおける地域活動は本来、「学生が地域に対してサービスをする」のではなく、「地域住民と学生がそれぞれにエンパワーする」ことが趣意である。すなわち、高齢者のスマホ利用促進は、高齢者自身によって企画運営されていくべきである。こうした基本的な視点が改めて浮き彫りになる出来事であった。

(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題

上述のとおり、今年度においては新型コロナ禍で地元住民との接触が事実上禁じられるという状況下、学生が主体的に課題を発見し、地域に対して「スマホデビュー講座」というイベントの形でソリューションを提案することができた。学生の主体性が高い次元で実現したという点で、評価できる。

しかし、地域住民と学生とが交流する中で「互いにエンパワーする」というプログラムの本旨は、まったく実践できなかった。その結果、主に地域住民の側に、学生に対する依存構造ができてしまったように思われる。

次年度に向けては、エンパワの本旨を改めて地域住民に対して丁寧に説明し、地域課題を自ら解決しようとする取り組みの中に学生を巻き込んでもらえるよう、コーディネーターとしてさらなる工夫を行うことが求められよう。

「子どもにやさしいまち」を作ろう

担当教員：田村公江

(1) 取り組みの趣旨・目的

「子どもにやさしいまち」とは、子どもの権利を満たすために積極的に取り組むまちのことである。本プロジェクトでは、子ども支援を手掛けるNPOや民間団体と連携して、「子どもにやさしいまち」を作るための学習と実践を行う。



▲zoomでのリハーサルの様子

(2) 2021年度の取り組みの紹介

①授業時間内の学習

1) 「龍大生と学ぶ子どもの権利 2021」を作成する（前期）

2019年度を受講生たちが作成した教育コンテンツ「龍大生と学ぶ子どもの権利」を基にコロナ禍においても実施できるようにオンライン版を作成した。その際、受け入れ先の一つである「CAPセンター・JAPAN」の職員2名を模擬参加者とするリハーサルをズームで実施し、アドバイスをもらった。

2) 外部講師の話を聞く（後期）

- ・受け入れ先の一つである「かんちゃんの小さな家」の主催者、佐子完十郎氏

日時：2021年10月15日

内容：どのような思いで「かんちゃんの小さな家」を運営しているか、イベント開催に際してどのようなことに気をつけているか、スタッフの心得など。

- ・アルコール依存症の当事者である渡辺洋次郎氏

日時：2021年12月24日

内容：依存症からのリカバリーとはどういうことか、どのような子ども時代だったのかなど話を聞いた後、渡辺氏が問いかけた問い「生きづらさは誰もが経験しているのではないか」についてディスカッションした。

②実習受け入れ先での活動

1) CAPセンター・JAPAN

この団体が開催する「子どもへの暴力防止のための基礎講座」（2021年4月10、11、18日）を8名の受講生が受講した。

2) かんちゃんの小さな家

ここでは「かんちゃんホットルーム」というイベントが開催されている。これは、地域の子ども、保護者、お年寄りが集まって交流し、昼食を作って共に食べるというものである。

コロナ対策のため料理はできなくなったが、受講生たちは子どもと遊んだり、仕事を補助したり、スタッフとして活動した。

③受講生企画

1) 子どもに関する社会調査の企画

小学生を対象にアンケート「コロナ禍の学校生活」を企画し、小学校の先生を対象にインタビュー「コロナ禍の子どもたちの様子」を企画した。しかし、実現には至らなかった。

2) 社会学部学会が発行している『龍論 (RONRON)』に「龍大生と学ぶ子どもの権利 2021」についてまとめた文章を寄稿した。

(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題

①「龍大生と学ぶ子どもの権利 2021」の成果と課題

成果：受講生たち全員が自主的に作成に取り組み、「子どもの権利」について学ぶことができた。実施する際、ファシリテーターの役割を経験することができた。

【内容】

1) 基礎的な言葉の定義を参加者に伝える。

2) 参加者に事例カードを分類してもらう

子どもの権利が侵害されているかもしれない事例のカードを、「子どもの権利が侵害されている」「侵害されていない」「どちらでもない、わからない」の3つに分類してもらう。

3) パワーポイントでレクチャーをする。

4) レクチャーを踏まえて、事例カードを「子どもの権利条約の条文カード」と対照させる

【実施】

コロナ禍ではあるが対面での実施が可能となり、対面で使えるように調整して、2回実施することができた。

・夏のオープンキャンパスにおける実施（8月8日）

・平安高等学校における実施（11月29日）

課題：幾つかの事例について、子どもの権利の侵害かそうでないかに関して受講生の理解と教員の理解が食い違うことがあった。その際、議論を深めることがあまりできなかった。

②受講生企画の成果と課題

成果：受講生企画のうち、小学生へのアンケートと小学校の先生へのインタビューは、小学校の校長先生の許可をいただくことができず、実現しなかったが、『龍論』への寄稿（「ワークショップ『龍大生と学ぶ子どもの権利 2021』を通して」）は受講生たちが分担して執筆することができた。

課題：受講生たちの自主性を尊重したかったのが教員からアドバイスすることを控えたのだが、もう少し受講生たちと意見交換したかった。



▲こどもの権利についての発表の様子
(オープンキャンパスにて)

雑創の森プレイスクールプレイワーカー

担当教員：久保和之

(1) 取り組みの趣旨・目的

子どもたちをめぐる様々な問題は、もはや教育や心理的なアプローチだけではなく、社会全体の構造的な問題として考えなければならない現状があり、子どもたちの自発的活動の組織化や社会参画活動あるいは自然体験活動を支援しつつ、地域社会における子どもたちの居場所を築く力をもった「プレイワーカー」が必要とされている。近年、全国的に「冒険遊び場」と呼ばれるプレイパークが増えており、そこで活動するプレイリーダーの育成が急務の問題とされている。

本プロジェクトでは財団法人が運営する「雑創の森プレイスクール」にて、子どもの自発的活動や支援をするプレイワーカーとして実習を行う。現地でスタッフのアシスタントとして子どもに対するプログラムを実施していき、実習を通じて子どもの活動を支援する技術や知識を身につけ、多様な現場で対応できる人材育成を目指すことを目的とする。

(2) 2021年度取り組みの紹介

プレイワーカーとしての基礎的素養を身に付けるために様々なプログラムを体験した。まず、プレイスクールの施設やフィールドを視察しながら、活動場所などを学習した。また、毎週土曜日に活動している「冒険クラブ」と「発明クラブ」に参加し、前期はスタッフのアシスタントとして活動に参加して経験を積み、後期はリーダーとしてプログラムに関わり、ゲームの企画や運営を担当した。

(3) 2021年度取り組みの成果と課題

前年から続いているコロナ禍の影響により、現地で実習する機会が限られていたが、できるだけ多くの実習時間を確保するようにしたことにより、実際にプレイスクールに行って実習をたくさん経験することができた。参加した実習生の人数によって担当する役割内容が増減した部分があるが、後期からは少人数で実習に取り組めたため、十分に子どもと関わることができ、コミュニケーション能力の向上につなげることができた。また、限られた回数ではあるが夜のプログラムも運営することができ、貴重な体験を得た。

本プロジェクトは、実際にプレイスクールに赴いて子どもと関わることによって体験しながら学ぶことがメインであるため、現地に行かずに学ぶことが非常に難しいのが課題である。受け入れ先の都合により、今後の活動が無くなるので、子どもと関わる知識や技術、態度を学ぶ機会を作っていくことは今後の課題である。



ガイダンスの様子
(フーチンによるスクール概要説明)



発明クラブ
(マカロニでクリスマスツリー作成)



冒険フーチン
(ススキの穂でミミズク作成中)



冒険ジョージ
(森の中で服についた草の実がいっぱい)



企画の打ち合わせ
(クリスマスイベント、ブラックサンタ)



ナイトゲームの運営
(シュウマイじゃんけんで対決)

大学は社会共生に何ができるのか

—文化財から“マネー”を創出する—

担当教員： 高田満彦

(1) 取り組みの趣旨・目的

文化財の有効活用、特に観光における活用促進の機運が近年高まり、2019年4月には文化財保護法が改正・施行された。滋賀県は日本遺産や文化財等有形無形の文化財を京都、奈良に次いで数多く有しながら、これらの地域に匹敵する経済効果を生み出していない。殊に大津は国際観光都市京都に隣接する位置にありながら観光業等において経済効果が低い。何が課題で、それをどのように解決すればよいのか。



【フィールドワーク：大津市 三井寺】

本プロジェクトは次の目的をもって開講している。

- ① 大津が持てる文化財というリソースの強みを観光資源として生かしながら、マネーを創出する方策を考える。
- ② 行政からの政策待ちではなく、民間企業やNPOと連携しながら、これらを貴重なリソースとして生かす方法、各組織の連携の在り方等を考える。
- ③ 取り組みの先進地や研究対象地域・大津を大学生の柔軟な発想を生かして実際に歩き、体験を通して問題の解決に取り組む。

(2) 2021年度の取り組みの紹介

今年度は対面式授業が復活し、座学と学外実習を織り交ぜながら活動に取り組んだ。

本プロジェクトの主たる学修活動はフィールドワーク（以下FW）である。学期前半はコロナ禍のためFWは延期せざるを得なかったが、座学で専門家による講義・ディスカッションを挟みながらFWの行程表や予算を作成して学修へのモチベーション維持を図った。7月には待望の学外実習／FWが解禁となり、以後、感染症に細心の注意を払いながらFWと専門家による講義を交互に続けた。FWの順序性についてはコロナ禍に合わせて組み換えを行ったが、結果として年間7回のFW、専門家による11回の講義が実現した。さらにこれらに加え、夏と冬に計2回のプロジェクト独自のワークショップや発表会、他大学（愛媛大学）との研究交流も行うことができた。コロナ禍にありながらも取り組みは通常の年以上に充実した。これも本プロジェクト所属の学生たちの高い意欲と実行力が原動力になったのではないと思われる。

(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題

<成果>

- ・ プロジェクト開講 3 年目を迎え、これまでの活動から得た知見の積み上げと、新たな課題解決への取り組みを通して身に付けたスキルやネットワーク構築力が一段と向上した。
- ・ コロナ禍にありながらも実習系科目ということでの対面式授業が認められ学修の幅が広がり、年間 7 回の FW、専門家による 11 回の講義も実現した。これらに加え、夏と冬に計 2 回のプロジェクト独自の発表会やワークショップ、他大学（愛媛大学）との研究交流が実現できた。
- ・ 3 学年の層をなす 10 名の受講生（1 年次生：6 名、2 年次生：2 名、3 年次生：2 名）が、3 つの学科在籍の強みを生かしながら活動を行う「組織的で建設的な研究集団」ができ、本プロジェクトでのこれまでの経験や新しい発想を活かして活発な活動を展開した。



【フィールドワーク 長浜市豊国神社】



【町家の説明を受ける：大津百町館】

- ・ 昨年度、学生自身がオンラインによりワークショップや発表会を開催した経験があり、今年度は開催規模や時期等に応じてオンラインと対面式を使い分けるなど、学生が主体的に判断して開催を可能にする柔軟な対応ができるようになった。コロナ禍の制限がある中でもやりきる実行力、企画力、発表力がついた。

<課題>

- ・ 1 年次生～3 年次生の受講者数に差が生まれ、年次別の活動計画時には学生数が少ない年次の負担が大きくなるなどプロジェクト運営上の問題が生じた。
- ・ コロナ禍の収束時期が見えず、「町家」という文化財を活用した施設に宿泊するという本プロジェクトの重要な活動を 2 年続けて FW に組み込むことができなかった。
- ・ 1 年次生への次年度受講の勧めとして今年度も実施した「現場主義入門」における学生のプレゼンとプロジェクト PR の方法、社会共生実習のオープンゼミに相当する「社会共生実習オープンプロジェクト」の開催等による受講希望学生の発掘と勧

誘等により多くの学生が社会共生実習に参加できるような仕掛けが必要である。



【里坊の町 大津市坂本】



【ガイドによる説明 大津事件の現場】



【大津絵の絵付け体験】



【彦根城 屋形船の試乗】



【對馬佳菜子様／観音ガールによる講演】



【現地での聞き取り調査 近江八幡観光物産協会】



【オンラインで行った
夏のワークショップ】

農福連携で地域をつなぐ

－「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」

担当教員：坂本清彦

(1) 取り組みの趣旨・目的

障がい者の雇用機会拡大と農業の働き手確保を主な目的に広がってきた農福連携は、近年、障がい者だけでなく高齢者やひきこもり者など多様な人と地域をつなげる取り組みへと進化しています。本プロジェクトは、滋賀県栗東市で農福連携で地域をつなげる先進的な試みを進めてきた「おもや」を舞台に、障がいを持つ人たちとの圃場での農作業や農産物の出荷作業など、農業と福祉が交差する多様な活動に直接参加して、農業や福祉の現場の課題を学んだり、障がい者もふくめて多様な人々がどう働き、生き、つながりをつくっていけるのかを考え、実践することを目指します。

(2) 2021年度の取り組みの紹介

初年度の本プロジェクトでは、まずおもやの方々と信頼関係を築くことを一番の目標としました。学生も教員も、おもやの利用者（福祉サービスを利用する障がい者）さんやスタッフの方々と積極的にコミュニケーションをとり、一緒に働いても安心という関係をつくるよう心がけました。

とはいえ、前期はコロナ禍による学外活動が制限されたため、チームビルディングも兼ねて受講生に少しでも農作業や作物について学んでもらうよう、瀬田学舎で野菜やハーブなどを植える作業を行いました

(写真右上)。

前期終盤からはおもやに出向いての活動となりました。トマトの整枝（枝切り、写真右下）、収穫した野菜の選別など出荷準備作業、圃場の片付けなどを、利用者さんやスタッフの方々と共に行いました。おもやの人たちに教えてもらいながら、受講生たちは慣れない農作業にもすぐになじんでいきました。





農業には楽しいことも多い反面、たまねぎの根と葉をひたすら切り落とす（写真左上）、ハウスの周囲にスコップで排水用の溝を掘る（写真左中）、といった地道な作業や重労働もあります。こんな農福連携の地味な現実を知ってもらう一方、受講生には作業の合間に利用者さんに話を聞いたり、作業の参与観察をしたり、黙々と活動しながらもアクティブな学びに取り組んでもらいました。



また、農業を地域につなげるおもやの取り組みとして、くさつ Farmers' Market にも参加しました。受講生が、おもやの田んぼでとれた稲わらを使ったリースの飾りつけをするワークショップをスタッフのお力を借りて企画、運営しました。子供から大人までたくさんの人に参加してもらい、交流しました。こうした形で農業をさまざまな形で地域につなげる経験をしてもらいました（写真左下）。



（3）2021 年度の取り組みの成果と課題

おもやの方々に受講生を受け入れてもらい、時には交流を通じて喜んでもらったりと、受入先との信頼関係構築という目的はおおよそ達成できたと考えられます。作業や交流を通じて、農福連携の地道な現場の様子や、課題も多い農業と福祉の現実の一端だけでも受講生に知ってもらえたことも成果です。

一方で、コロナ禍で現場活動時間が制限され、予定していた受講生による体系的な調査や自主的なイベントなどの企画提案は当初の目論み通りにはできませんでした。農福連携の制度面での事前学習も十分だったとはいえません。また初年度でもあり、おもやスタッフも教員も手探りだった効率的な活動調整や、実習生の安全確保も改善の余地があります。来年度は、おもやが最近始めたブドウ栽培など新展開を受講生が楽しみつつ、農福連携についてより深く、自主的に、かつ安全に学べるよう実習を組み立てていきます。

いくつになっても、出かけられる！

～高齢者を元気にする介護ツアー企画～

担当教員：高松智画

(1) 取り組みの趣旨・目的

介護が必要な高齢者の生活問題に関する学習やプランニングの基礎的な学習をするとともに、高齢者へのインタビューから、どのようなツアー企画にするかを検討していく。そして、下見やプレゼンテーションでのフィードバックを重ねて、企画内容を練り上げていく。

このような活動を通じて、本プロジェクトは、どのような配慮や介助があれば、介護が必要な高齢者の「出かける」ことを保障できるのかを考えるとともに、「出かける」ことを妨げている問題・課題は何か検討すること、さらには、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につけることを目的として開講する。

今年度は、昨年度と同様に新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、参加者募集、当日に備えた参加者との面談、ツアーの実施、終了後のふりかえり、ツアー参加者への記念品の贈呈を行うことができなかった。

(2) 2021年度の取り組みの紹介

① 高齢者の生活問題、ツアーの意義やプランニングの方法に関する学習

まず、高齢者の就労や介護を要する高齢者とその家族が抱える問題、高齢者の外出に関する問題、バリアフリーとユニバーサルデザインに関する学習などから、高齢者の「出かける」ことを妨げている問題状況についての学習を行った。

つぎに、「安全・安心かつ魅力ある観光を高齢者や障害者に提示し積極的に外出する意欲を持って頂くことで生活の質を向上させる」ことを目的とし、バリアフリー調査・評価、介護旅行の企画・運営等を行っている、「株式会社どこでも介護」の大西氏と橋本氏から、介護旅行の事例や参加者の声などをあげながら、高齢者にとって「出かける」ことの意義や、どのようなプランを作成すればよいかなどについて講義を受けた。

さらに、昨年度の実習で作成したツアー企画の企画書、参加者募集のフライヤー、ツアー紹介動画の閲覧をしたうえで、受講生一人ひとりがどのようなツアーにしたいかについて話し合いを行った。

② 高齢者へのインタビュー

ツアーの対象となる高齢者とコミュニケーションが図れるようになること、普段の生活の中での困りごとや要望などを聞き取ることで、高齢者への理解を深めること、旅行や外出への要望について聞き取ることを目的として、京都市内のデイケア施設利用者と大津市

内在住の3名の高齢者を対象にインタビューを行った。

その後、インタビュー内容を全員で共有し、ツアーコンセプト、対象、行先や内容について意見交換を行った。

③ ツアーの企画とプレゼンテーション

ここまでの学習と実習をふまえて、受講生それぞれのアイデアから6つにグループ分けを行った。そして、グループごとにツアープランのコンセプトを考え、下見を行い、ツアー企画書を作成して持ち寄り、プレゼンテーションを行った。

6通りのプラン（長浜観光と体験ツアー、龍谷大学・西本願寺ツアー、車いす利用者を対象にした宇治ツアー、京都水族館ツアー、通天閣お笑いツアー、京都観光ツアー）について話し合いの結果、長浜観光と体験ツアー、車いす利用者を対象にした宇治ツアー、京都水族館ツアーの3つのプランに絞り込んだのち、グループの再編成を行いプラン作りに取り組んだ。

再度、3つのプランのプレゼンテーションを行い、実施するプランを2つにすることを決定し、いずれのプランにするかを話し合った。その際、大西氏と橋本氏からのアドバイスを参考にし、大学生らしさと体験や交流を大切にしたいプランにすることを念頭に置きながら選定を行った。

その結果、車いす利用者を対象にした宇治ツアーと京都水族館ツアーの企画を実施することを決定した。

そして、実施にむけて詰めていく必要があること、日程、広報や募集、実施までのタイムスケジュールなどについて検討を行った（企画書は以下のとおり）。

プラン1 「車椅子だからこそ！ ～わくわく安心宇治ツアー～」 企画書（概要）

◎ツアーコンセプト◎

「車椅子だから難しい」を「車椅子だから楽しめる」に！

京都宇治の美しい景色や建物、美味しいものをぎゅぎゅっと詰め込んだ欲張りツアー

◎実施日：2022年3月24日(木)

◎タイムスケジュール（晴れの場合）

9:00 JR 京都駅中央改札口前のロータリー集合

顔合わせ・流れ確認

平等院・南門前へ移動(約35分)

10:00 平等院・南門前到着

平等院観覧(平等院鳳凰堂前でみんなで写真撮影)

11:20 和食処 SATORI へ移動

11:30 昼食『和食処 SATORI』

13:30 昼食終了

上林三入へ移動

- 14:00 お抹茶づくり体験・休憩
- 15:05 買い物(お土産) 平等院表参道
- 15:30 JR 京都駅へ移動(約 35 分)
- 16:00 JR 京都駅到着・解散

プラン 2 「大学生と行く! ゆったり京都水族館・梅小路ツアー」企画書 (概要)

◎ ツアーコンセプト ◎

日常生活とは異なる空間である水族館をゆっくりと見学
大学生と映える写真撮影や匂い袋作り体験を通じた交流

◎ 実施日: 2022 年 3 月 22 日(火)

◎ タイムスケジュール

- 9:00 京都駅中央口集合 トイレ休憩&移動 15 分
- 9:33~35 の電車に乗る
- 9:40 梅小路西駅出口到着
- 9:50 明日香さん到着(徒歩 5 分) 匂い袋作り体験
- 11:45 体験終了
- 12:00 昼食「花車」到着
- 14:00 昼食終了
- 14:20 京都水族館(徒歩 10 分)
- 16:30 水族館見学終了、水族館出口集合
- 16:45 梅小路京都西駅到着
- 17:01~04 の電車に乗る
- 17:05 京都駅到着

④ ツアー実施にかわる活動

参加者募集用のフライヤーも企画書作成とともに作成し、実施に向けて企画内容の詰めを行っていったが、昨年度に続いてツアーが実施できるかどうか危ぶまれる事態となった。

ツアー企画の詰めを行っていた時期には、新型コロナウイルス感染症に対して京都府、大阪府にまん延防止等重点措置が発令されていた。さらに、3 月以降も同措置が延長されること、感染力が強く、重症化した患者の多くは高齢者であることをふまえて、ツアーを実施するかどうかについて話し合いを重ね、結果として、高齢者が対象であること、対面での募集や面談が困難であることから、ツアーの実施は断念することを決定した。

(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題

受講生が 16 名と昨年度より大幅に増加したことから、当初たくさんのツアーのアイデ

アが出てきた。そこから絞り込み、企画として練り上げていくために多くの議論を重ねた。そして、プラン作成に先立って行った高齢者へのインタビューや学習をふまえながら、大学生だからこそできるプランとは何かを考え、それを企画に落とし込んでいくために何度も企画書を修正した過程から、他者の意見を尊重しつつ自らの意見を主張すること、意見をまとめて形にしていくことについて、多くの学びを得たのではないかと考える。

また、高齢者の身体状態に合わせて移動手段は何を使えばよいか、移動時間をどのくらいと見積もればよいのか、トイレや食事・買い物の店の設備ではどのようなところを確認しておく必要があるのかなどについて、企画の検討や下見を通じて学ぶことができた。

いつでも参加者募集ができるまでに企画が出来上がっていただけに、ツアーが実施できないことは本当に残念でならないが、一連の実習を通じて一つの目標に向かって協力しあうチームワークについても学ぶところが大きかったのではないかと考える。

▼宇治ツアーのちらし



車いすだからこそ！
〜ワクワク安心宇治ツアー〜

参加申込書

☑募集人数は4人ですがご夫婦の参加をご希望される場合は対応致しますのでお気軽にご参加ください！

☑雨天の場合もツアーは行きます。平等院鳳凰堂から源氏ミュージアムの変更致します。

☑介護タクシーでの移動が基本となりますので雨天でも安心してご参加ください。

☑申込方法

ふりがな	
氏名	(歳)
ご住所	
ご自宅電話番号	
携帯電話	
お休、ツアーで心配なこと	

▼京都水族館ツアーのちらし



日程 3月22日（火）

行程表

9:00	JR京都駅 中央改札口 集合
9:50	かほりの店「明日香」到着 ☆匂い袋作り体験
12:10	湯の宿松菜 味処「花車」到着 ☆昼食【天ぶら御膳】
14:15	京都水族館 到着
16:30	京都水族館出口 集合
17:10	JR京都駅 中央改札口 到着・解散

募集対象（定員：4名）
お一人での歩行が可能の方

注意事項
・雨天決行（大雨など荒天の場合は中止となる可能性があります。）
・移動は全て徒歩のため、歩きやすい靴でお越し下さい。
・キャンセルはツアー3日前までにご連絡をお願いします。

費用 5,700円

申し込み用紙

ふりがな	
氏名	
住所	
電話番号	-
ご要望など	

多文化共生のコミュニティ・デザイン

～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～

担当教員：川中 大輔

(1) 取り組みの趣旨・目的

グローバル化が進展する中、人々の国際的な移動は活発化している。COVID-19 パンデミックの影響を受ける前の動向として、国連経済社会局（DESA）『国際移民ストック 2019』を参照したい。同報告書によれば、2000年に約1億7300万人であった国際移民人口は2019年に2億7200万人に達し、世界人口の3.5%に至っている。日本も例外ではない。法務省出入国在留管理庁の統計によれば2019年の在留外国人数は2,829,416人であり、2012年以降増加し続けている（2012年の在留外国人数は2,033,656人）。日本も既に多くの外国人が定住し、多文化社会となっているのである。また、在日コリアンをはじめとするいわゆる「オールドカマー」も、1990年の入管法改正以降に渡日した「ニューカマー」と呼ばれる人々も、移民世代を重ねて日本社会に定着していつている。

しかし、日本が定住外国人にとって住みやすい社会なのかと言え、そうではない。「言葉の壁・制度の壁・意識の壁」という3つの壁が立ちはだかつて、生活の様々な場面で苦勞を強いられることとなる。日常のコミュニケーションの中で攻撃的な差別に晒されることも見受けられている。日本には体系的／包括的な移民政策や多文化共生に関する基本法もなく、定住外国人支援は自治体や地域住民の努力任せになっていると言っても過言ではない。こうした中で、定住外国人の人々が直面している「生きづらさ」から発せられる声に学び、どのような社会変革を成し遂げていくべきかを見いだしていくことが必要とされている。果たして日本社会は「あってはならない違い」をどれほど解消できているのだろうか。「なくてはならない違い」をどれほど保障できているのだろうか。時代と共に変化する「あってはならない違い／なくてはならない違い」について、ホスト社会の人々の認識はアップデートされているのだろうか。「ちがいを越えた協働」をどれほど実現できているのだろうか。多文化共生という言葉は浸透し、社会的にも多くの人に支持されるものとなっているが、残念ながらその「実」が伴っていない。

そこで、本プロジェクトでは、「実」の部分で今どのような多文化共生の取組が求められているのか、その一端を明らかとすることを目的とする。具体的には京都の在日コリアンの方々との交わりを中心に、多文化共生を目指したまちづくりの課題を見だし、その課題達成のための活動を企画・実践していくこととなる。この過程を通じて、ダイバーシティの向上が、私たち一人ひとりの生を豊かにし、また、新たな社会をつくりだす力の増大につながる道筋を探究していきたいと考えている。

(2) 2021 年度の取り組みの紹介

2021 年度前期も COVID-19 パンデミックの影響を受けてオンライン実施となった。そのため、文献やインタビューなどを通じて問題への理解を進めることに力点を置くこととなった。具体的にはまず受講生の抱く多文化共生に係る疑問を共有した上で、日本の多文化化の現況や歴史的な経緯、他国との比較、コロナ禍で生じている問題についてグループで調べて、相互に発表しあうこととした。この事前学習の後、本プロジェクトのコミュニティパートナーである南珣賢氏（NPO 法人京都コリアン生活センター・エルファ事務局長）、前川修氏（希望の家児童館館長・地域福祉センター希望の家所長）、叶信治氏（希望の家カトリック保育園園長）にインタビューをおこなった。そして、インタビューを通じて得られた情報を整理しながら、活動地域となる東九条（京都市南区）における多文化共生を巡る課題を整理し、その内から受講生の問題関心に基づく企画テーマを複数に絞り込んでいった。これらの準備を整えた上で、夏季休暇期間には実際に東九条のまちを巡り歩きながら各施設を訪問し、現場の様子を感じ取ることとした。



後期授業は対面実施となったことから、感染症対策を行った上で、現場での実習活動に取り組んだ。今年度は過年度よりも受講者が多かったため、エルファで2チーム、希望の家児童館で1チーム、コミュニティカフェほっこり（運営：NPO 法人東九条地域活性化センター）で1チームに分かれて活動することとなった。

エルファでは、在日コリアンの方々のライフヒストリーを聴き取る活動が取り組まれた。今年度は一世の方々だけではなく、二世や三世の方々からもお話を伺うこととなった。その結果、移民世代にかかわらずに共通する課題に加えて、移民世代ごとに異なる課題があることへの理解が進むこととなった。また、当事者に加えて支援者の方々へのインタビューも行われた。支援に関わることとなった経緯や背景、日々の関わりの中での気づきや直面する日本社会の問題が語られる中で、課題の多側面を捉えることとなった。聴き取り活動の後、それらの内容をもとにした冊子を作成し、同世代を対象とする教育啓発活動に取り組むことをチームとして決定し、実習期間終了後も制作活動等を進めている。



希望の家児童館では、子どもや職員の方々との関係づくりから取り組み始め、子どもから韓国の遊びを教わって一緒に遊ぶなどの活動を重ねることとなった。そうした関わりを通じて、(移民背景の人々との共生にとどまらない)「幅広い多文化共生」の考えに立脚しながら、子どもや保護者の多様性をとらえていった。この際、特に「遊び」に着目して、多世代・多地域でどのような遊び方の違いがあるのかを調べながら、児童館を利用する子どもたちの遊びの文化の幅を広げるための企画を検討することとなり、実習期間終了後も具体化を目指してアクティビティデザインに取り組んでいる。

京都市地域・多文化交流ネットワークサロンのコーディネートによって、新たに活動先となったコミュニティカフェほっこりでは、運営者や利用者の方々との交わりを通じて、こうした場がどのような願いと共に設けられているのかをお伺いすることから活動を始めることとなった。その上でほっこの現状課題から、新たな利用者を地域内外で増やしていくために新規商品開発に取り組むこととなった。検討段階で候補となったものについては試作品を製作し、利用者アンケート等を通じて絞り込みを進めた。その結果を踏まえて採用が決定したメニューについては、レシピや調理説明動画、ポップを整えていっており、実際に提供される運びとなっている。実習期間終了後もこれらの動きを進めており、まん延防止等重点措置が解除されるタイミングでの商品提供開始を目指している。



(3) 2021年度の取り組みの成果と課題

コロナ禍ではあったが、受入先の方々の積極的なご協力により、受講生は定住外国人はじめ地域で多文化共生を推進する様々な人々と直接に交わる機会に恵まれた。その交わりを通じて、受講生は多文化共生まちづくりの課題を当事者視点から捉えるということを一定程度行えたのではないかと思われる。受講生のレポートからは、無知から生じる「痛み」と、活動を共にする「喜び」の中から自己変容に突き動かされていていっていることも読み取れた。多文化共生社会を創り上げていく市民性の涵養を進める一つの機会となったと考えられる。

しかし、現場での実習が後期からとなったため、大幅に授業期間を越えて活動することとなり、受講生・受入先の双方に負担が大きくなったことは否めない。また、後期後半では活動成果を形にすることに傾注することとなり、理論的な観点から考察を深めていく熟慮／対話の時間が十分にとることができなかった。次年度は年間を通して実践と理論との往還が進むように留意し、社会学部生によるプロジェクト活動としての強みがより一層発揮されるべく努めたい。

障がいをもつ子どもたちの放課後支援

担当教員：土田美世子

(1) 取り組みの趣旨・目的

障がいをもつ人の個性への理解は、共生社会の実現に欠かせない。プログラムでは、放課後等デイサービス「ゆにこ」での実習を通じて障がいをもつ子ども達との関わり方を学び、子ども達の未来につながる支援について考える。

放課後等デイサービスは、「学校就学中（小1から高3）の障害児童に対して、放課後や夏休み等の長期休暇中において、生活能力向上のための訓練等を継続的に提供し、障害児童の自立促進、放課後等の居場所づくりを推進する事業」、である。



プロジェクトでは、子どもたちとの関わりを通じて放課後等デイサービスの役割について理解を進め、障がいをもつ子ども達の「個性」を受け入れる社会のあり方を、共に探る。

ひとりひとりの子どもとの関わりを通じて得た理解と共感をもとに、共生社会の実現のために何が求められるのかについて、実習生ひとりひとりが考察を深めることを、プログラムの最終目標とする。

(2) 2021年度取り組みの紹介

本プロジェクトは、2021年度から開始した半期(前期)のプログラムである。放課後等デイサービス「ゆにこ」で行う週1回の実習を活動の核とする。但し、2021年度は、5月から6月後半までコロナ禍による学外実習の制限のため、前期期間4回の実習を行うのみになった。このため、学内での代替実習として、ICTを活用したゆにこ職員との授業内での対話等の学内実習を実施した。「ゆにこ」での実習に向けて、学内では①障がいの特性についての理解、②行動分析を用いた子どもの行動変容、についての授業を実施した。また、週1回の学外実習開始後は、各自の子ども達との関わり



の場面を振り返り、受講生同士で討議し、よりよい関わりについて考察した。考察は、実習報告書を通じて「ゆにこ」に提出し、指導者からのフィードバックを得た。

プログラム後半では、通所児童の保護者からの講話、「ゆにこ」指導者による総括の講話の授業を実施し、受講生の学びのまとめ作業を行った。



(3) 2021 年度の取り組みの成果と課題

必要にせまられ設定した学内実習ではあったが、学外実習に向けて「ゆにこ」の指導者と web 上で出会い、その考えから学ぶという成果が得られたと考える。一方では、実際に「ゆにこ」での実習に入り、具体的な子ども達との関わりのイメージを得てからの学内での講話の意義は、更に大きかった。通所児童の保護者の講話からは、障がいをもつ子どもを産み育てることの大変さと、同時にその喜びを知ることで、「ゆにこ」の役割を家族の視点から考える機会となった。また、「ゆにこ」管理者の講話からは、施設立ち上げへの想いだけでなく「社会で働くこと」についても学ぶ機会となった。



今年度初回の実施に向けて、実習先との協議は行っていたが、実際に実習に入った後の実習内容、学生へのフィードバックの方法等、目標達成に向けて今後更に協議する必要があると考える。更に、学外実習参加が予定よりも後半にずれこむことで共生社会についてのワークを行う時間確保が難しく、学生ひとりひとりの考察に任せる部分が多くなったことは次年度に向けての大きな課題である。（*下記は実習報告会での受講生の学びより）

障害をもつ人との共生社会について

共生社会を創るにあたって、障がいに対する考え方や偏見が問題点として考えられます。そのため、まずは障がいの有無で人を判断するのではなく、実際に関わってほしいと私は思いました。偏見だけで関わらないという選択肢を選んでしまうのは勿体ないことであり、関わってみると「ああ、こんなこともできるのか」と新たな気づきと出会うことができます。

実際、私は実習に行くまで医療的ケアの子と実際に関わったことがなかったためかなり緊張していましたが、同年代の子どもたちと先生方に誕生日を祝われてとても嬉しそうにしていたことや、話しかけるとニコッと微笑んでいたことにとっても衝撃を受けました。

偏見に囚われたり障がい者という枠組みで全てを考えるのではなく、その人の“個性”を見てほしいと思います。

自治体を PR してみる！

担当教員：岸本文利

(1) 取り組みの趣旨・目的

企業や自治体では、動画コンテンツを使った PR を進めたいと考えているものの実際には、動画撮影、編集のスキルを持った職員・社員の育成に手が回らない。さらに PR の本質を理解していない場合が多く、自分たちの主張を一方的に伝えるばかりで、消費者、市民が全く共感できない動画が多い。本プロジェクトでは、広報の本質を理解し、誰に何を伝えるのか、どうすれば伝える事ができるのかを受講生が考える。そして動画制作に必要な撮影、編集のスキルを習得し、そのスキルを使って動画作品を制作し、実際に自治体の公式ホームページで公開して市民に見てもらって評価される事を目的とする。またどうすれば、見てもらえるかを自治体職員と一緒に考える事も必要となる。自治体の公式ホームページにアップするためには、クライアントともいえる自治体側に制作した動画内容について了解・納得してもらわなければならない。学生の視点からだけで作品を作るのではなく、最終的に自治体に納得してもらえるようなプレゼン能力、配慮も必要となる。これは、社会に出ても広告を作成する広告代理店や企業の社員になっても同じで、ユニークで画期的な広告であっても最終的にはクライアント、社内の上承を得る事ができなければ、世に出る事はない。実践的な実習であり、企業や自治体が必要とする PR 広報の本質と動画コンテンツ制作のスキルを習得できるプロジェクトを目指す。

(2) 2021 年度の取り組みの紹介

履修学生が定員よりも 5 名程多かった事から、2 人または 3 人のチームで映像作品を制作する事にした。4 月、5 月でまず撮影と編集の基礎をプロの編集マン、カメラマンから直接指導を受けた。次に PR の舞台となる門真市を実際に訪ね、市職員の案内で門真市の商店街や経済成長期に形成された住宅密集地など門真市の課題点、特色などを説明してもらった。そして市職員と一緒にブレインストーミングを行い、門真市の何をテーマにして PR 作品を作るのが面白いかを考えてもらった。PR 臭のしない、動画視聴者のイメージが良いものになる事を目指してテーマを考えてもらった。そのテーマをもとに実際にリサーチに入り、取材が可能であれば、ロケハン、撮影に進んだ。本来は夏休み前にテーマを決めて、夏休み中に撮影を行い、後期 10 月から編集というスケジュールだったが、コロナによる緊急事態宣言が出て、8 月、9 月の現場実習が中止され、スケジュールが大幅に遅れた。その結果、10 月、11 月に各チームはテーマを決定し、撮影に入る事になった。編集は 12 月にずれ込み、門真市へのプレゼンも 12 月から 22 年 1 月に延期され、各チームは正月返上で編集作業を行う事になった。HP にあげるためには表現の改定なども門真市から求められ、2 月 9 日を期限に編集の修正を行い、2 月 17 日に市長の講評となった。



▲プロのカメラマンより撮影方法を学んでいる様子



▲市役所でのインタビュー取材

(3) 2021年度の取り組みの成果と課題

7チームで7作品が完成した。作品は「謎の建物」「守口市 VS 門真市」「門真市のホビランドって?」「市庁舎は元学校」「門真市のゆるキャラ PR 作戦」「激辛職員」「門真市のサラメシ」の7本で、門真市の職員からも好評だった。ネタ決めに苦しんだチームも多かったものの、最終的にはPRの意味、例えばお堅い公務員のイメージ像に対し、面白いキャラの濃い職員を取り上げてフォーカスをあてる事で、イメージを変える事ができる事や今や歴史の遺物となった給水塔に関し、マニア垂涎のモノが門真市にある事を紹介する事でPRできる事を実習生は理解できたと思う。

ただ、個人ではなくチームで映像作品を作る事は、構成やテーマ選びでチーム内の合意形成にそれなりの時間を割かなければならず、かなり面倒だったと思われる。また編集は1人で行うため、編集担当の学生に負担が集中した事も今後の改善点になるとと思われる。一方で、1人がインタビューしもう1人が撮影するなど個人の負担が軽減されるというメリットもあったと思われる。

最も大変だったのが、コロナ感染拡大の緊急事態宣言が出て8月、9月に予定していた撮影が10月後半、11月にまでずれ込んだ事で、全てのスケジュールがずれ込んで、編集に十分な時間が取れなかった。また後期の試験や就活、卒論提出などの期限に重なり、実習生の負担はかなり重いものになってしまった。完成がタイムリミットギリギリになった事で、門真市の意向（HPに出すにあたり、批判を招かないための修正）を受けての再編集が、テスト後になり、実習生にはさらなる負担になった事は、今後の課題。コロナ禍で2カ月間、現場に入れず取材も全くできない状況で、実習生のモチベーションが落ちた事も課題で、今後はこうした不測の事態も想定し、スケジュールを大幅に前倒しして行う事も検討する必要があると感じた。

動画撮影時の様子▶



発信情報

WEB

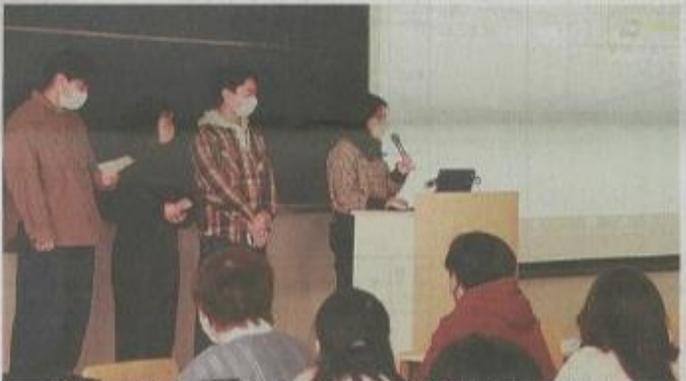
- ① 龍谷大学社会学部「社会共生実習」公式ウェブページ

URL : <http://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/>

メディア

- ① 2022(令和4)年1月16日(日) / 中日新聞 (この記事は中日新聞の許諾を得て掲載しています)

地域の困り事 住民と解決
大津 龍谷大生が活動成果を報告



住民らと共に地域の課題解決に取り組んだ、龍谷大学社会学部の学生約百十人が十四日、活動成果の報告会を、同大の瀬田キャンパスで開いた。

地域住民らと連携し、地域の困り事を一緒に解決する社会共生実習の一環。十組に分かれた学生が昨年四月からの活動を、パワーポイントを使って説明した。農業を通じた障害者との交流や、介護が必要な高齢者が楽しめる日帰り旅行の企画などの取り組みを披露した。

大津市の中央学区でイベントを開いた学生六人は、自治会長や市職員からの聞き取りで、子育て世帯同士の交流がないという課題を

発見。絵本を通して親子で楽しめるイベントを企画した。

地元住民や小学校などから集めた三百冊以上の絵本を会場に置き、工作やボランティアらのマジックショーなどを開催。計八十人の親子らが楽しんだ。

二年生の中代羽流さん(こ)は「いろいろな年代向けの絵本が集まり、おもしろかった。子どもたちが本につながるきっかけになっていれればいい」と話した。(北村大樹)

活動成果を報告する学生ら＝大津市の龍谷大瀬田キャンパスで

龍谷大学 社会学部

2021 年度 社会共生実習 活動報告書

2022 年 3 月 発行

発行元 龍谷大学 社会学部

住所：〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1 番 5

TEL：077-543-7760 FAX：077-543-7615

E-mail：shakai@ad.ryukoku.ac.jp

URL：https://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/



公式 Web サイト



公式 Twitter



公式 Instagram



公式 Facebook

龍谷大学 社会学部 社会共生実習の
公式 Web サイト・公式 SNS では
最新の情報を随時更新しています！